

サンカの初期分類

段階的拡張を続けてきた山窩観念を分別すると、次の6つになる。

- ①イスラエル十支族の末裔で本邦に渡来したアマベ氏。
- ②アマベと同族のモノノベ氏。
- ③本来縄文系の宇佐氏の血統に潜入した秦氏。
- ④満洲から朝鮮半島経由で渡来したトルコ系騎馬族。
- ⑤実質的セファルダムのポルトガル冒険商人とアヤタチ系の混血、
- ⑥実質セファルダムのオランダ人とアヤタチ系の混血、これである。

以上が本来の山窩（第1種）とその拡張観念であるが、周辺には別種の山窩がいた。すなわち、

- ⑦アマベ氏が華南海岸から引率した倭人に随伴してきた山岳民族。
- ⑧トルコ系騎馬族の渡来に際し、満洲からついてきたツングース系の非耕作民、これである。彼らはアヤタチの配下として第1種と混在していたため、世人から第1種山窩と同一視されて、山窩と呼ばれるようになったもので、第2種である。

三角寛をはじめとし、柳田国男・後藤興善ほか従来のサンカ研究者はみな、第2種の生活形態を甚だ奇として、これを論ずるに止まったため、第1種の存在は、これまで世間にまったく知られなかった。尤も、生態観察などに囚われていては第1種の存在に気が付く筈もなく、内部から情報公開があって初めて分かるものであろう。ところが第1種が自らの存在の露呈を極力避けてきたことは、現に上田家の出自で日本史を稼業にしながら、アヤタチについてまったく触れようとしない学者を見れば明白である。それだけではない。著名なサンカ研究者の中に、第1種の請託を受けて世人の眼を第2種に誘導した者の存在は、その気で著作を読み直せばすぐに気が付く筈だ。ここまで隠すのはあらゆる組織に共通する癖で、〈企業秘密〉を守るためと思えるが、アヤタチ家に出た近代の鬼才・上田鬼三郎すなわち出口王仁三郎が、大本の御筆先に、「イスラエルの12の流れを元の1つに戻すぞよ」と叫んだ意味を、史家は考えたことがあるのだろうか。本稿は『疑史』と題する以上、これを見逃すわけには行かず、ここに5回の連載となったが、私が典拠とした『吉園周蔵手記』は、上田家の外孫・渡辺政雄から周蔵が直接聴いて記録したもので、第1種そのものを焦点にしている。巷間では、自らサンカと称える月海黄樹だけが第1種に触れている。ペーパーバックではあるが、むしろこういう所に真相が潜んでいる好例であろう。

(『読書日記』2008/08/04「[疑史\(第40回\)アヤタチとサンカ\(終\)](#)」記事)